

〈小特集Ⅰ〉 東アジア哲学・思想の諸相とその探究Ⅱ

序 文

本特集「東アジア哲学・思想の諸相とその探究Ⅱ」は、京都大学人文科学研究班課題公募班（A班）「中日の近代哲学・思想の交差とその実践」（2023-2025年度、班長・廖欽彬〔中山大学教授〕）の成果のひとつである。現在（2025年12月）までに、23回の共同研究会が実施され、毎回、班員及びゲストの充実した報告に対して、活発で濃密な議論が展開されてきた。

すでに同班は『人文学報』123号（2025年6月）で小特集「東アジア哲学・思想の諸相とその探究」（班員の廖欽彬・郭旻錫・張政遠各氏と福家が投稿）を組んで研究成果を発表したほか、廖欽彬・張政遠・福家崇洋編著『甦る田辺哲学 田辺元生誕140周年記念論集』（法政大学出版局、2025年12月）と廖欽彬・秋富克哉・福家崇洋編『越境する知としての西田哲学』（京都大学学術出版会、2025年12月）を刊行し、続々とその成果を世に問いつつある。

『甦る田辺哲学』は、2024年8月末に同班が田辺元記念哲学会・求真会との共催で開催した「田辺元生誕140周年記念シンポジウム」での各報告を再構成かつ追加して編んだ論文集であり、『越境する知としての西田哲学』は2025年1月に開催した「中日の近代哲学・思想の交差とその実践 第11回共同研究会 西田幾多郎没後80周年記念シンポジウム」の各報告を再構成かつ追加して編んだ論文集となる。田辺哲学・西田哲学を学際的かつ国際的な視点から、その現代的意義を明らかにしたものである。さらに同班では今後、研究班3年の研究成果を総括する論文集を編むことも予定している。

この成果群に追加されるのが、本特集「東アジア哲学・思想の諸相とその探究Ⅱ」となる。本特集は2つのパートから構成される。ひとつは論文篇で、廖欽彬「東アジアの精神病学の探究——中村譲を中心に——」、福家崇洋「丸山眞男と日本ファシズム論——内なる「超国家」を求めて——」である。廖論文は、帝国日本と植民地期台湾で活躍した精神科医・中村譲（1877-1963年）の著作を哲学的に考察することを通じて、「東アジアの精神病学の形成」とその背後における「儒釈道を含んだ東洋的な精神要素」を丹念に辿ったものである。福家論文は、戦後啓蒙を代表する政治学者・丸山眞男（1914-1996年）の敗戦前から敗戦後における「ファシズム」認識・論の形成を「超国家」という視角から解き明かしたものである。

もうひとつの論考群は、同班第16回共同研究会（2025年7月）に実施された、植村和秀氏（京都産業大学教授）の著書『文部省の国体明徴政策——思想はどのようにして政策になるのか』（創元社、2025年）の書評会原稿をもとにしたものである。当日は、廖氏司会のもとで、須

永哲思氏（京都大学）、鷺澤遼祐氏（京都大学）、福家がそれぞれの専門分野に基づいてcommenterをつとめ、最後に著者の植村氏より丁寧なりプライをいただいた。

その後、各自がこの時の議論をふまえて執筆したものが本特集に掲載したものとなる。鷺澤氏は昭和戦前期「日本精神」論・日本主義の思想史・政策分析で成果をあげている気鋭の研究者で、本論でも著者植村氏の問題関心にもっとも近い分野から鋭い質問をなげかけている。教育史を専門とする須永氏は、戦時・戦後日本教育史を綴り方運動や京都人文学園などの「私設学校」から問い直す作業を精力的に続けており、分厚い蓄積をもとに文部省政策の描き方を中心に問題提起を行っている。福家の原稿は、本書を「政策の思想史」と読み解くことで、その可能性を引き出そうとしたものである。最後に、植村氏より、各コメントを受けたかたちで、本書の方法と特徴を振り返りながら今後の展望をまとめていただいた。

以上のように、本特集の各原稿は、これまでの共同研究班の成果がもとになっているものである。この成果がきっかけとなり、本研究班のテーマ「中日の近代哲学・思想の交差とその実践」の検討がさらに進み、東アジアの学術交流がいつそう盛んになることを願っている。最後に、研究班の研究・事務・運営などの側面から支えていただいた方々にこの場を借りて御礼を申し上げたい。

2025年12月

福家崇洋